

# 京の博物館

## 目次

巻頭言……………	1	トピックス……………	6
おこしやす		京のかるチャーすぽっと「ひと・もの・わが館自慢」…	8
・財団法人益富地学会館《石ふしぎ博物館》…	2	美術館・博物館と私……………	11
・佛教大学宗教文化ミュージアム…	4	ティータイム……………	12

関西から

文化力  
POWER OF CULTURE

## 巻頭言

### 就任のご挨拶にかえて

尾崎 正明

(京都国立近代美術館長)



昨年七月から、京都国立近代美術館の館長を務めることになりました尾崎です。

時のたつのはひどくはやいもので、既に半年がたちました。朝は美術館に出勤するのに、白川の流りに沿って歩いています。着任した時分は、澄んだ水の流れがいかにも涼しげにみえたものが、今ではとても寒々とした印象を受けます。

白川といえば、縄手通と交叉するところに大和橋がかかっています。江戸の文化・文政期を代表する陶工で、画家としても知られる青木木米は、この付近にあった「木屋」という茶屋に生れたと聞いています。窯は青蓮院のすぐ近く、栗田口にありました。木米は篠崎小竹の撰した墓碑に「識字陶工」と刻まれたほどの知識人で、田能村竹田、頼山陽といった当時の文人墨客たちとも深い交流があり、多くはありませんが、絵画にも優れた作品をのこしています。

ひどく私ごとになりますが、そもそもこの世界にはいったきっかけは木米の南画の作品をみたことでした。それだけに、京都も疏水が白川に注ぐあたり、栗田口のすぐそばにあるこの美術館に勤めるようになったことに、何か因縁めいたものも感じています。

私は東京以外で働いたことはほとんどなく、そこしか知りません。初めての京都でいまだに右往左往し、周囲の人にご迷惑をおかけばかりしています。日々の仕事に追われ、この美術館をなんとか理解しようとしている状況で、これからどうするかといったような具体的なイメージがあるわけではありません。

まだ短い時間ですが、こちらに勤めるようになって、京都というのは適度な広さに、さまざまな機能がコンパクトにまとまっている都市という印象をもつようになりました。そこに公私立の博物館、美術館が点在しているわけですが、さほど離れているわけではありません。さらに京都は観光都市であって、それだけにいろいろな面で協力しやすい条件を備えているようにみえます。

東京でも博物館や美術館が協力関係を強めようとする動きは顕著です。ただ、東京は広大でとりとめのないところがあります。京都はそこが違います。もちろん、お互い組織の在り方も、専門とする分野も違っており、すぐには何かできないかもしれません。それでも長い目でみて、どこか協力しあえる部分を探っていくことが必要でしょう。

今、博物館、美術館は冬の時代といわれ、どの館も厳しい状況に置かれています。知恵を出し合うことで、すべては無理にしても、問題の一つでも二つでも解決できればその意味は大きなものがあります。幸いなことに、最近、京都の国公立の博物館、美術館の四館で協議会が発足しました。京都の博物館、美術館が活性化することで、京都それ自身の発展につながればさらに素晴らしいことです。京都国立近代美術館もそのために、できるだけ努力をしていきたいと考えております。

おこしやす

# 石のふしぎを体感しよう

財団法人益富地学会館 ますとみ ち がくかいかん 《石ふしぎ博物館》 主任研究員 藤原 卓

益富地学会館は、京都市上京区、京都御苑の西にある小さな石の博物館です。

昭和48年、益富<sup>かずのすけ</sup>壽之助博士（1901～1993）によって“日本地学研究会館”が設立され、その後、平成3年に、財団法人化にともなって名称が“益富地学会館”に変わりました。設立者の益富博士は平成5年に他界されましたが、その後も財団法人として活動を続けています。



設立者 益富壽之助博士

当館の歴史は、昭和7年に益富博士が、東京の櫻井欽一博士らと共に“日本礦物趣味の会”を創設されたところから始まっているといっても過言ではありません。戦前から戦後の厳しい社会を乗り越え、益富博士は薬剤師として薬局などの経営をされながら、アマチュアの研究者として鉱物や岩石の研究に携わり、地学の世界に大きな功績を残してこられました。益富博士は昭和31年に、奈良の正倉院宝物に収蔵される“石葉”<sup>せきやく</sup>の研究で薬学博士の称号を得られましたが、薬学と鉱物学に精通されていた益富博士でなくてはなし得なかった業績といえるでしょう。

益富博士は、自然科学の基本ともいえる“地学(地球科学)”を、一般の人々も楽しくわかりやすく学ぶことができ、さらに研究を深めたい人への手助けが出来るような施設を目指して益富地学会館を設立されました。

展示室に陳列されている益富博士の収集による数多くの標本からは、単に学術的な価値や貴重さだけでなく、まさに益富博士の石に対する愛情を感じとることが出来ます。

## 益富地学会館の展示室

益富地学会館は3階建ての建物です。1階は事務所・ホール・ミュージアムショップ、2階は研究室・図書室、3階が展示室になっています。3階の展示室は、原則、土・日・祝



益富地学会館 外観

日に一般公開しています。

1階から3階展示室までの階段の壁には、大文字山、鞍馬山などの写真を展示しています。階段をゆっくり上りながら京都の地学名所を楽しむことが出来ます。

3階の展示室では、「これが石なの？」と思う変わった石、恐竜の糞化石、地球が造り上げた芸術作品ともいえる美しい宝石の原石など、一般の人が見て楽しく、珍しい石のほか、学術的にも貴重な標本、日本産の鉱物や化石など、地学の専門家や研究者にも役立つ標本も公開しています。京都府の鉱物や化石は常設展示していますので、日本各地・世界各地から来られた方のみならず、京都にお住まいの方にも是非一度は見ていただきものです。また、3ヶ月交代で、アマチュアの鉱物や化石のコレクターが収集された標本をお借りして展示するコーナーもあり、好評です。さわれる標本コーナーは子



3階 展示室

供達にも人気で、石の感触を肌で感じて楽しむことができます。

展示室公開日には展示解説員が常駐し、展示標本や地学に関する質問にも応じています。

## 益富地学会館の活動

益富地学会館では館内展示のみでなく、鉱物や化石の観察採集会など野外でのフィールドワークを通して、体験型の地学普及活動を行っています。

鉱物・岩石・化石・地質の観察・採集を目的にした“野外研修会”、“岩石薄片<sup>はくへん</sup>教室”・“化石クリーニング教室”などの実習教室、“石を楽しむ会”・“石ふしぎゼミ”などの研究会と、様々な行事を年間を通して行っています。

夏休み期間には、子供たちを対象に、“かわらの石観察研究会”・“化石観察採集会”・“砂鉄教室”・“石の名前をつける会”を行い、毎年たくさんの参加者があります。

秋と春には京都と大阪で、“石ふしぎ大発見展”という催しを実施しています。この催しは石のふしぎや楽しさを少しでも多くの人にアピールする目的で、特別展示（今年は、“レアメタル”ってなに!?というテーマで行いました）、イベント、



野外研修会 兵庫県岩ヶ谷鉱山にて

講演会、石の即売会などを行っています。今年度は10月に3日間、左京区岡崎公園の“みやこめっせ”で実施し、約2万人の入場者がありました。



岩石薄片教室 益富地学会館にて

## ◇鉱物鑑定士制度

益富地学会館が認定する“鉱物鑑定士”制度は、平成8年に始まり、今年で13年目になります。鉱物鑑定士1級から3級、鑑定士補4級から9級まであり、京都・大阪・名古屋・東京で講習会や認定試験を行っています。すでに1500人近い、鑑定士・鑑定士補が認定されています。

最近では理科離れが問題になっていますが、特に地学は高校の必修科目でなくなるなど、“石”を学ぶ機会が少なくなってきました。しかし、町では石を販売する店が多くなり、“石”が一種のブームになってきています。植物や昆虫などと同じように、野外で見た“石”に名前を付けることができるようになれば、自然や石の世界に仲間入りすることが出来るのではないかと思います。

### 財団法人 益富地学会館

所在地 〒602-8012

京都市上京区出水通烏丸西入中出水町394

TEL(075)441-3280 FAX(075)441-6897

交通 地下鉄烏丸線「丸太町」駅下車②出口より徒歩5分  
市バス51、京都バス45「烏丸下長者町」下車徒歩2分

開館時間 10:00~16:00

開館日 標本展示室…毎週土曜日・日曜日・祝日  
(年末年始・盆休などは除く)

1階ミュージアムショップは月曜日以外開館  
(年末年始・盆休などは除く)

入場料 (標本展示室のみ) 200円、小学生以下無料

ホームページ <http://www.masutomi.or.jp>

# 佛教大学宗教文化ミュージアムの概略

佛教大学宗教文化ミュージアム

本館は2003年4月、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業補助金を受け、本学広沢校地に設立された「アジア宗教文化情報研究所」を母体とし、2008年4月に開館しました。



佛教大学宗教文化ミュージアム 外観

設立の主旨は人文学領域の研究の発展に寄与するとともに、広く一般市民に対し、仏教を中心とした宗教文化全般に関する理解を促すことにあります。同時に、さまざまな生涯学習の場と機会を提供することによって、社会貢献を行うことを目的としています。

調査研究活動として、「シルクロード部門」「歴史文化部門」「浄土宗文化部門」といった研究部門をもち、宗教文化に関する調査研究を推進しています。その成果をもとに、第一研究成果展示室、第二研究成果展示室で常設展示のほか、年四回ほどの特別展や企画展示、企画陳列を開催し、研究成果の発信と公開、啓蒙を行っています。また劇場である宗教文化シアターを併設しており、形と心の双方を伝達することが可能なことが大きな特色です。

## 展示室案内

第一研究成果展示室常設展示は、本学園部校地から出土した考古遺物や、本館の浄土宗寺院調査の一環として寄託された仏像群、民俗信仰関係の資料などを展示していますので、宗教文化の多様性を理解していただけるでしょう。また、第二研究成果展示室は、本学の歴史やゆかりの先生方に関わる資料を展示しており、展示品から本学の発展と先生方の学問への情熱を感じていただけるはずです。



第一研究成果展示室



第二研究成果展示室

## 宗教文化シアターの紹介 .....

本館は劇場施設として「宗教文化シアター」を併設しているのが特色です。この劇場は107席のゆったりとしたスペースのなかで、宗教芸能を中心とした無形文化財の公演などを、年4回ほど行っています。これらの公演は研究と普及・啓蒙公演の両面を兼ね備える内容を心掛けています。



宗教文化シアター

## 館の逸品紹介 .....

本館の数ある収蔵資料のうち、逸品といえるものを、以下、紹介しましょう。本学の園部校地（南丹市）には遺跡地図に古墳2基があることが知られていました。

岸ヶ前1号墳、2号墳で、これらについては校地整備・造成に先立って、本学では遺跡調査会を設けて発掘調査を行いました。

古墳の被葬者は、古墳時代、旧園部町周辺を支配した小豪族だったと考えられます。

岸ヶ前2号墳3号木棺から、<sup>しょうかくつきかぶと たんこう かたよろい</sup>衝角付冑と短甲、<sup>かちゅう</sup>肩甲から構成される甲冑が出土しました。ここに葬られた人物が武人的



旧園部町の古墳から出土した甲冑

性格を持っていたことがうかがえます。

南丹市域には数多くの古墳が存在しますが、これほど原型をよくとどめた甲冑の出土は珍しく、古代丹波の歴史を語るうえで貴重な資料と言えます。

甲冑のほかにも、同墳からは多数の玉類が出土しました。

玉類は緑色や赤色メノウなどの勾玉、管玉から構成されています。とりわけ注目できるのが、長さ約6センチ以上もある、大ぶりの<sup>へきぎょく</sup>碧玉（メノウの一種）製勾玉で、これらの大きさは出土段階で、府内最大でした。

このような装飾品は、生前の被葬者の権威を演出するものとして用いられたと考えられます。



深い青緑色が美しい勾玉

## おわりに .....

近年、経済的効率や物質文化の伸張で、人の心の問題を置き去りにするなど、社会や個々の人間の精神のなかで多くの問題が生まれています。

本館はこのような情勢のなか、宗教や信仰に基づいた私たちの文化に対して、人文科学の立場から、事業と活動を通して問題提起をしていきたいと考えています。

### 佛教大学宗教文化ミュージアム

所在地 〒616-8306 京都市右京区嵯峨広沢西裏町5-26

TEL(075)873-3115 FAX(075)873-3121

交通 市バス59号系統(一部)「広沢池・佛大広沢校地前」下車すぐ

10・26・59号系統「山越」下車 西へ徒歩約13分

91・93号系統「広沢御所之内町」下車 北へ約8分

開館時間 10:00~17:00 (入館は16:30まで)

休館日 日曜祝日他、大学が定める日。

詳細はお問い合わせください。

料金 無料 (一部有料期間あり)

ホームページ <http://www.bukkyo-u.ac.jp/bu/guide/inst/asia/>

### “体感”ほんまものの京都

ミュージアムロードは、市民や観光客の皆様へ、京の博物館・美術館等を身近に感じていただくことを目的として、毎年開催しています。

15回目となる今回は、開催に向けて9月から木村幸比古相談役を座長とする企画委員会で検討を重ねてきました。第15回京都ミュージアムロードは、平成22年1月30日(土)～3月22日(月・祝)に開催し(会場により期間が異なります)、過去最高となる63館にご参加いただけます。

「体感」ほんまものの京都」をテーマに、各会場館において、それぞれの専門性を活かし、いろいろな分野の「ほんまものの京都」を体感していただく展示企画や体験企画を実施します。

例年、参加者から大変ご好評をいただき、楽しみながら会場をつなぐ「スタンプラリー」も実施します。これは、各会場に設置されているスタンプを集めて応募していただくと、「京都市内博物館ガイドブック」をはじめ、各会場館からご提供いただいた様々なミュージアムグッズが抽選で当たるプレゼント企画です。

スタンプラリーの台紙は、各会場の他、区役所、図書館等にも設置します。その他、京都市教育委員会のミュージアムロードのホームページからプリントアウトしていただいて、参加いただくことが可能です。

また今年度は、「参加館同士のつながりを作る取り組み」として新しい企画を検討しました。これは、参加館同士が交流を深め、連帯感を育まれることを目的に、「京都ミュージアムロード開催期間中、参加館職員の他館への見学は、無料とする企画」です。実施にあたっては、当企画に賛同していただける館を募り、京博連事務局で作成する参加館見学カードを各館に1枚ずつ配布します(各館の希望に合わせて見学カードではなく、無料招待券で対応も可)。

当事業が新たな「京の冬の風物詩」となるべく、より一層の充実をはかっていきたいと思っております。



京都市内博物館ガイドブック「京のかるちゃーすぽっと」。市内博物館施設の情報が満載(英文対訳も掲載)。

#### 昨年度風景

#### いけばな体験



協力：いけばな資料館 会場：京都国際マンガミュージアム

#### 大文字山・石見て歩き



協力：益富地学会館、場所：大文字山

### 新規加盟会員の紹介

さる11月に開催した第4回幹事会において、新たに7施設の加盟が承認されました。これにより、京博連加盟会員は、正・賛助会員あわせて207となりました。以下が新規加盟館です。



- 1 **お辨當箱博物館** べんとうばこはくぶつかん 東山区間屋町通五条下ル上人町433 半兵衛麩内
- 2 **駒井家住宅(駒井卓・静江記念館)** こまいけいゆうたく こまいたく しずえきねんかん 左京区北白川伊織町64
- 3 **三千院 円融蔵** さんぜんいん えんにゅうぞう 左京区大原来迎院町540
- 4 **寂光院 宝物殿 鳳智松殿** じゃっこういん ほうもつでん ほうちしゅうでん 左京区大原草生町676
- 5 **染・清流館** ぞめ せりゅうかん 中京区室町通錦小路上ル山伏町550-1 明倫ビル 6階
- 6 **三宅八幡神社 絵馬展示資料館** みやけはちまんじんじや えまてんじ しりょうかん 左京区上高野三宅町22
- 7 **六波羅蜜寺 文化財宝物館** ろくはらみつじ ぶんかざいほうもつかん 東山区松原通大和大路東入二丁目轆轤町81-1

## 平成21年度 京都市博物館ふれあいボランティア養成講座

京博連加盟館で活動する「博物館ふれあいボランティア」の養成講座を、京都市教育委員会との共催で、今年も実施しています（平成22年2月まで。全5回）。

第1講では、花園大学副学長・同歴史博物館長の芳井敬郎先生から「博物館を探る」という題で、博物館の種類や展示の裏話など大変わかりやすく、軽妙に御講義いただきました。さらに、レクリエーションコーディネーターの川瀬恵子先生によるアイスブレイキングで、受講者の緊張もほぐれ、うちとけた雰囲気となりました。

第2講では、「ボランティアとは」と題し、龍谷大学社会学部地域福祉学科の筒井のり子先生から、ボランティアとはどのような存在か、またボランティアとしての責任の持ち方、大切にしたいことなどを、お話しいただきました。

第3講は、京博連加盟施設である月桂冠大倉記念館の全面的な御協力のもと、同館で講座を実施。京都ホスピタリティ研究所代表の友澤弘先生から、「おもてなしについて」と題し、永年のホテル勤務の御経験から、おもてなしの精神や、サービスとホスピタリティの違いについてお話いただきました。先輩ボランティアによる体験談や施設案内もあり、講座修了後の活動に向けて、受講者同士の会話もはずみました。

講座内では、ボランティアの役割や、一般利用者との関係のあり方などについて、グループに分かれての討議も行っており、現在52名の受講者が熱心に学ばれています。



ユーモアあふれる講義に聞き入る（第1回）



ボランティア導入施設からの説明（第2回）



先輩ボランティアによる体験談（第3回）

## 博物館連続公開講座

毎年、多くの市民の方に御参加いただいている「博物館連続公開講座」（全5回）。京都當道会会館での第1回、立命館大学国際平和ミュージアムでの第2回、京都府京都文化博物館での第3回講座を終えて、残すところ2回となりました。参加された方からは、いずれの回にも大変好評をいただいています。

残る第4回は、1月26日(火)京都市動物園（申込受付終了）、第5回は2月15日(月)京のじゅばん&町家の美術館 紫織庵で開催します（第5回への申込みを希望される場合は事務局へお問合せください。連絡先は本誌裏面）。

### 第1回

**10月23日(金) 京都當道会会館**

副会長の大木富志氏より「伝統音楽の継承」と題したご講義をいただいた後、箏や三絃を使った曲目の演奏を聞かせていただきました。

### 第2回

**11月20日(金) 立命館大学国際平和ミュージアム**

館長の高杉巴彦氏に「平和な社会とは何？」と題したご講義をいただき、同館のボランティアガイドによる解説を受けながら、館内見学もさせていただきました。

### 第3回

**12月8日(火) 京都府京都文化博物館**

同館の学芸員お二人から、「受け継いでいく祇園祭」と題したご講義をいただいた後、祇園祭に関する貴重な展示品の数々を見学しました。



## オムロンコミュニケーションプラザ

オムロン株式会社  
コーポレートコミュニケーション部

沼田 剛

### わが館を紹介

オムロンは1933年に立石電機製作所として創業して以来、一貫して世の中のニーズをいち早く感知し、世に先駆けた技術を開発し、商品やサービスを提供することで社会にお役立ちすることを目指してきました。オムロンでは、こうした取り組みを「ソーシャルニーズの創造」と呼び、常に揺らぐことのない重要な価値観として企業理念に組み込み、企業活動を展開しています。

当プラザは、創業から現在、そして未来に続く「ソーシャルニーズの創造」への取り組みを、各時代における社会ニーズとの関わりを交えてご紹介しています。展示は2つのフロアで構成され、「歴史のフロア」では、創業から現在に至るまで「ソーシャルニーズ創造」への取り組みの足跡を展示しています。「技術のフロア」では、21世紀の社会ニーズである「安心・安全」「健康」「環境」に対するオムロンの取り組みやコア技術などを、動作モデルとともに見て・触れて・体験できるように展示しています。



技術のフロア

### わが館ひと自慢

オムロンの創業者・立石一真は1900年に熊本に生まれ、1933年にオムロンの前身である立石電機製作所を創業しました。「歴史のフロア」の立石一真のコーナーでは、今も当社に脈々と受け継がれる創業者の技術開発や経営への思いを、本人の肉声を交えたビデオ映像でご紹介しています。立石一真の起業家精神のパワーを感じていただけることでしょう。



歴史のフロア

### わが館もの自慢

当プラザは、JR京都駅から西へ徒歩5分、交通至便の「オムロン京都センタービル啓真館」の中にあります。啓真館は、当コミュニケーションプラザの他、社員研修施設や企業内保育所が入る地上8階建ての複合施設です。正面および側面はガラス張りで、ビル全体の形は京都らしく「ほんぼり」をイメージした形状とし、京都の街に灯る「明かり」のように、周辺の街並みとの調和に配慮しています。



啓真館 外観

- 所在地  
〒600-8530  
京都市下京区塩小路通堀川東入  
オムロン京都センタービル啓真館内
- TEL  
(075) 344-6092(代表)
- FAX  
(075) 344-6093(代表)
- 交通  
JR・近鉄・市地下鉄「京都」駅下車徒歩5~7分  
京都駅烏丸バスターミナルより徒歩約5分
- 開館時間  
10:00~12:00 13:00~16:00  
(入館は15:30まで) \*事前予約制
- 休館日  
土・日曜日、祝日およびオムロンの休業日
- 料金 無料
- ホームページ  
<http://www.omron.co.jp/about/promo/showroom/plaza/>



## 京都市廃食用油燃料化施設



京都市環境政策局  
適正処理施設部

今井 友佳子

### わが館を紹介

京都市では、低炭素社会・循環型社会の構築に向けた取組の一環として、地球温暖化防止京都会議（COP3）が開催された平成9年度から、廃食用油燃料化事業を実施しています。使用済みてんぷら油を環境にやさしいバイオディーゼル燃料に転換し、ごみ収集車や一部の市バスの燃料として活用しているもので、平成16年度に竣工した京都市廃食用油燃料化施設は、自治体としては国内最大規模である日量5,000リットルの製造能力を有し、年間150万リットルものバイオディーゼル燃料を供給することができます。



施設外観

### わが館ひと自慢

京都市廃食用油燃料化施設で作られるバイオディーゼル燃料は、京都市内の一般の家庭やレストラン、旅館などから出される使用済みてんぷら油を原料としています。一般の家庭からの回収は、市民の皆様との共汗により、それぞれの地域を基本単位として結成された「地域ごみ減量推進会議」や、各地域におけるボランティアの方々の御協力のもと、市内におよそ1,400箇所ある回収拠点にポリタンクやのぼり旗を設置し、毎月回収を行っています。



使用済みてんぷら油を回収

### わが館もの自慢

植物性の食用油は菜種や大豆といった植物から作られますが、それらは大気中の二酸化炭素を吸収して成長します。そのため、燃焼することによって生じる二酸化炭素は、その植物が成長過程において吸収した二酸化炭素量と相殺され、大気中の二酸化炭素総量を増やさないとされており、これは一般に“カーボンニュートラル”と呼ばれています。



軽油などの化石燃料の代わりに、生物由来の使用済みてんぷら油から作ったバイオディーゼル燃料をごみ収集車や一部の市バスの燃料として活用することで、京都市では年間4,000tもの温室効果ガスの削減に寄与しています。また、バイオディーゼル燃料は、自動車排ガス中の黒煙を大幅に減少し、酸性雨の原因となる硫酸化物もほとんど発生しない低公害燃料でもあります。

今後とも、市民・事業者・行政の連携のもとに使用済みてんぷら油の回収の輪を広め、回収拠点を拡大するとともに、地球温暖化防止や地域において資源が循環する地産地消の取組として国内外に積極的にアピールしていきます。



ごみ収集車170台で使用

#### ●所在地

〒612-8244  
京都市伏見区横大路千両松町447

#### ●TEL (075)604-5880

#### ●FAX (075)604-5884

#### ●交通

市バス「南横大路」下車徒歩10分  
乗用車の場合、阪神高速8号京都線「伏見」  
出口より約10分、または第二京阪道路「小  
椋池」ICより15分

#### ●見学可能曜日・時間

月曜日～木曜日 13:30～16:00

\*事前予約制（所要時間は1時間程度）

#### ●料金

無料

#### ●ホームページ

<http://www.city.kyoto.lg.jp/kankyo/page/0000065549.html>

## 箔屋野口

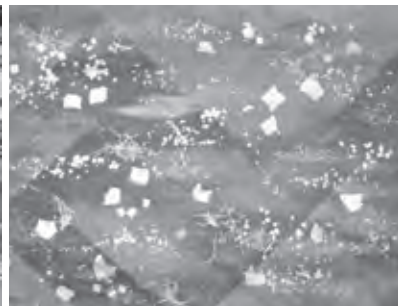
野口 康

### わが館を紹介

箔屋野口は明治10年、野口安之助金糸平金製造所として創業、金糸や西陣の帯などに平面のまま織り込まれる平金糸を製造販売して参りました。平箔、引箔とも呼ばれる平金糸は沈丁花科の三俣などの繊維を漉いた和紙に漆を引き、金銀箔、



箔屋野口外観



平家納経写し

プラチナ箔、色漆などを使い一枚一枚加色、平面のままの細い糸のように裁断されたものが帯などに織り込まれています。箔屋野口では裁断前の平箔や、平箔が織り込まれた帯、同じ技法による屏風、書道に使われる料紙、箔画などもご覧いただけます。

家屋は明治22年棟上げの典型的な町屋建築で、ベンガラ糸屋格子、中庭、奥座敷や庭、裏庭、土倉など典型的な町屋の姿を保っています。

金箔は室町～江戸時代にお城や寺院などの襖や屏風の絵の雲どりや背景として日本を象徴する色でもあります。これら金碧障壁画と呼ばれる当時の金箔の姿などについても詳しくご説明させていただきます。

### わが館もの自慢

金碧画の模写や修復にあたり当時の箔がもっている風情の再現は、今日まで不可能でありました。三寸そこそこ、厚さ一万分の数ミリの正方形の金箔の中に秘められた風情の謎を解明することは当代の課題となり、復元すべき目標でありました。



紅白梅図復元試作

光琳の紅白梅図の擬作説が公表されたことは記憶にありがたいところです。そこで箔屋独自の紅白梅図や燕子花図

の金箔の復元試作をご賢察いただき、陰影に富んだ当時の金碧画、それが取りまく空間を思い描いていただければ誠に幸いです。

当家の庭は、建築当時の常緑樹の植栽をほぼ保っております。灯籠が大きすぎるなどと言われることがありますが、家人は考えたこともありません。石は放っておいても黙っておりますが、苔や庭石に生えるシダなど、毎朝、家人がその声を聞いて水をやったり、雑草を取り除いたりいたしております。水平でない床、傾きそうな塀、家人で塗り直したベンガラ格子など、120年の時間を耐えた町屋をお楽しみください。

箔屋野口では漆と箔による親子それぞれが制作した箔画も展示即売致しております。

### わが館ひと自慢

玄関、店の間、奥座敷などエアコンもございません。石油ストーブと扇風機は使いますが、50年前までは火鉢と団扇だけでありました。

自慢すべき人などはございませんが、そんな生活を営んできた昔の人どもを感じていただければ幸いです。



私たちがお迎えます (当主夫妻)

#### ●所在地

〒602-8443

京都市上京区元誓願寺通り大宮西入元妙蓮寺町546

●TEL (075)415-1150

●FAX (075)414-3434

#### ●交通

市バス201・203・59系統「今出川大宮」下車 徒歩5分

#### ●開館時間

10:00~16:30 \*事前予約制

●休館日 不定休

●料金 無料

## 京都国際マンガミュージアムを訪れて

京都市博物館ふれあいボランティア「虹の会」  
岩田 眞佐子

廃校になった龍池小学校の校舎を活用して2006年に開設された京都国際マンガミュージアムは、マンガの歴史を知る上で必要な資料館と図書館の機能を備えた、日本で初めての博物館です。

訪問してまず目に飛び込んできたのは、芝生が広がるグラウンドで太陽の光を浴びながらマンガを楽しむ、世代を超えた人々の姿。そのほのほのとした光景に目を奪われながらも、館内へ入ると、今度は壁面いっぱい、希少となった作品から現代の人気作品まで世界のマンガが。まさに圧巻のひとつことです。また若手のマンガ家が創作活動を行っており、マンガ家の「生態」を目にすることができ、紙芝居の口演もされていて、豊穡なマンガ文化を肌で感じることができました。

私はというと「めぞん一刻」を一気読み。「マンガも捨てたもんじゃない」と思いながら、ボランティアとしてはまだまだヨチヨチ歩きの若輩者ですが、機会があればここでお世話になりたいなあと思いながら帰路につきました。



## 思い出の泉屋博古館で

京都市博物館ふれあいボランティア「虹の会」  
柗 育子

私が初めて泉屋博古館を訪ねたのは今から四十数年前、学部の見学会の時だったと記憶しております。当時の私にとって比較的地味な作品である青銅器のみを四部屋に渡り常設展としている事にまず驚き、住友家がこれ程たくさんの青銅器に注目したことに興味を引かれました。そして一通り館内の作品を見終え、少し疲れた私の目の前に緑鮮やかな芝生が中庭一面に広がり、別館への渡り廊下から眺める東山の美しさ、特に、これ程贅沢に大文字山を借景としている建物の立地にも心地良い感動を覚え、以後印象に残る大好きな美術館となりました。

今回博物館ボランティア六期生として研修に参加させて頂き、作品の詳しい解説と細かな説明を伺っている間に、青銅器が身近にとてもいとおしく感じられる様になり、今秋よりこの館でボランティアとして活動出来る事に大変感謝しておりますし、日々の生活の中で、又今後のボランティア活動の礎として多くを学びながら、細く長く続けられればと願っております。



## 博物館との一期一会

京都市博物館ふれあいボランティア「虹の会」  
梅棹 雅子

ボランティア活動の経験はまだ数少ないですが、その中で心に残ったのは、10月の京都芸術センターの「かざり祇園祭・かきよやま鑄 職人の技展」です。多くの素晴らしい美術工芸品が大広間に展示されている中で、郭巨山の織物懸装品の見送の一つに、千宗室裏千家家元の揮毫された漢詩文が西陣織に、金糸で刺繍されたのを見たことは、まさに京職人の技を目の前にした感動の出会いでした。また、11月の宝鏡寺の秋の人形展。天皇陛下だけがお召しになるこうぜんのかほう黄櫨染御袍と、十二単衣が奥の書院に飾られ、皇室ゆかりの人形と皇女和宮様が遊ばれた鶴亀の庭を眺めての優雅な空間に浸った体験でした。

たまたま活動したご縁で多くの美術品との出会いがあり、実物を見た感動がありました。これからも来館者とのふれあいの中で、主催者との架け橋になり“来てよかった”“また、来ます”と満足感をもって帰っていただけるお手伝いを楽しく続けたいと思いました。



鶴亀の庭（宝鏡寺）



## ブリキのおもちゃと人形博物館と私

ブリキのおもちゃと人形博物館 副館長  
佐々木 輝之

平成19年12月、当館はリニューアルオープンしました。発端は二十一年前『ブリキの博物館』として始まりました。

そもそも、当館長の高山氏と私との馴れ初めは今から十数年前、退職を機にどういふわけか、古い玩具に興味を持つようになり、同時期、当館の存在を知り、客として通い続けました。

ところがある日、改築することを知り、あけてオープンの祝いに駆けつけたところ、高山館長より、スタッフ（副館長）の職務を承ったのがことの始まりでした。

オモチャの歴史は動く玩具としては江戸時代の“からくり人形”に始まり、明治、大正時代にはブリキ玩具はすでに製作されていましたが、昭和の大戦後に「オキュパイドジャパン製」として特にアメリカ等に輸出されだし、ブリキ玩具の最盛期を迎えました。私が今、副館長を兼ねながら修理を請け負うようになったのが、四、五年前、ある知人より動かなくなったブリキの車の修理を頼まれたのがきっかけでした。

なにせ四、五十年前の代物です、当然故障している物が多いですし、所々色はげ、サビがあるわけで、恐る恐る、ブリキの爪を起しつつ慎重に底板を外すと…油污れや綿埃わたぼこりで覆われた中に、モーターを見つけ、果たして動くかどうか、早速電池を直結して軸を指先で回してやると、“ウィーン”と小さなバイブレーションが甦りました、感動の一瞬でした。配線をやり直し、元通りに組み立ててスイッチをオン、見事走り出しました、蘇生したのです。

知人は感謝してくれ、私は楽しいと感じ、以後、私のライフワークとなりました。

所詮、オモチャは子供の遊び道具です。ところが当時の



マルサンのキャデラックを手に、館長の高山氏(右)と

設計者や製作者の技術力と職人技の凄さに感銘します。

フリクション(弾み車)・銅ゼンマイ・モーター等であの複雑な動きを演じさせるのです。布の毛布を着た擬人化した動物達は、コミカルな動きをして楽しませるのですが、その分複雑な構造のため、故障もよくするのが、玉に瑕ですが…。

ただ、面白いのが、本体に使われているブリキ板に時々、お菓子や食品メーカーのプリントを見ることがありますが、これは再利用の先駆けですね。

また外車への憧れか、数多くの車種が再現されました。中でも群を抜くのが「マルサンのキャデラック」です、これはコレクターの憧れの品です。

当館にはよく修学旅行の学生が訪れます。平成生まれの子供たちが館長の楽しい説明に興味を示して、陳列ケースを覗き観る姿に、もし、これらが今でもちゃんと動くところを見ればきっと彼等は驚くだろうと思うと、この役職の本望なのですが…。

早二年が過ぎ、今もって感じる場所は、はたして副館長の務めを果たしているのでしょうか？

発行 平成22年1月

編集・発行者 京都市内博物館施設連絡協議会事務局（京都市教育委員会生涯学習部内）

所在地 〒604-8064 京都市中京区富小路通六角下る 元生祥小学校内 TEL：075-251-0410 FAX：075-213-4650

ホームページ [http://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/soshiki/29-17-1-0-0\\_13.html](http://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/soshiki/29-17-1-0-0_13.html)